李昂「迷園」・『自傳の小説』における「他者」なる主人公

――九〇年代の台湾文学への一考察――

赤松美和子

一　はじめに

本稿では、台湾の作家、李昂（一九五二―）の「迷園」（一九九〇）と『自傳の小説』（一九九九）を分析対象としている。[1] 二編はいずれも主人公の記憶を遡及しながら、アイデンティティを追求した長編小説である。台湾において民主化が進み、作家を取り巻く状況も大きく変わった九〇年代、李昂はいかに小説を書き続けたのか、二編の小説を、「他者」というキーワードにより分析していく。本稿では「他者」を「社会的に阻外されている存在」と規定し、論を進めていく。

二　「他者」なる主人公―「迷園」1

「迷園」は、一九八六年から九〇年にかけて執筆された李昂にとって初めての長編小説である。『中國時報』に九〇年八月十八日から九一年三月十一日まで、連載（全百八十九回）後、同年三月に貿騰發賣股份有限公司より単行本として出版された。小説は、台湾の旧家に生まれ、留学経験のある女性朱影紅を主人公に、日清戦争後の

日本による植民地支配、第二次大戦後の国民党による強権支配を経て、現在の資本主義社会に至るまでの、一世紀の台湾の歴史を背景としている。一九五〇年代と一九七〇年代の二つの時間軸が交錯する中で、フラッシュバック、一人称と三人称の文体の混用が注目されると共に、大胆な性描写も話題をよんだ。

本書は三部構成で、「わたしは甲午戦争の末年に生まれました……」で始まる。これは主人公朱影紅が九歳のときに作文で書いた自己紹介で、王徳威も指摘しているように、[2]九歳の朱影紅が故意ではなく無意識に書いた結果、間違えたものだとされている。甲午戦争の末年とは台湾が日本に割譲された一八九五年である。朱影紅が生まれたのは一九四〇年代だと推測でき、「甲午戦争の末年に生まれ」ることは、あり得ない。しかし作家は故意に九歳の主人公に歴史を誤認させ、[3]私たちに「「私」と「台湾史」の二者を混同させ同一化」[4]させる戦略をとった。それについて王徳威は「却って朱影紅（及び彼女の台湾同胞）が長い間抑圧された政治的な潜在意識を露にした」[5]と指摘している。更に彭小妍は「「迷園」のストーリーでは多くのディティールが造られ、朱家の「ハイブリッド」の伝統を強調している、例を挙げると、主人公の祖先は「山地人、オランダ人の血統の福建移民の末裔である」[6]と述べている。このように「迷園」には、主人公と台湾の歴史とを重ね合わせるような記述が随所にみられる。また、叙述形態も一様ではなく、三つの叙述形態―三人称、主人公による一人称、及び父親からの手紙―をとっている。また、七十年代、五十年代（四十年代後半）の二つの時間軸が交錯している。

こうした文体の混用は、李昂にとっては、「迷園」が初めての試みではなく、「一封未寄的情書」（一九八四）で、既に用いられているものの、大半が三人称で語られている中で、一人称体描写が効果的に使われている作品は「迷園」が初めてである。

以下の引用部分は、主人公朱影紅が恋人と別れた後、「もう二度と彼に会えないのだろうか」と恐怖に襲われる

場面であるが、時間軸の移動が最も激しく、更に一人称と三人称とが交錯している。なお、引用箇所の①から⑪の番号は、人称と時間軸の変化を区別するために筆者が付したが、③から⑧については、省略し、人称と時間軸についてのみ、後述する。

① あの人が本当にもう行ってしまうという時、わたしはさよならも言わないで、ドアを閉め中に入ってしまったけれど、そのとたん急にもう一度あの人の姿をみたいという思いに駆られて、その思いがこらえ切れなくて、階段を駆け上がりよろめきながら二階の道路に面した部屋の窓まできたのだ。……　せめてもう一度見なくては。……つま先で精一杯背伸びをしても、塀はやはり高く立ちはだかっていた。もしかしてもう二度と彼に会えないのだろうか。

② 朱影紅六歳、菡樓の窓際の紫檀の椅子に立って、二階の窓から外を眺めていた。夜、真っ暗な中、手に提げた丸い懐中電灯の光が動き、園内をくまなく照らしていた。あたり一面は暗く、人は大勢いたが、みな知らない人たちばかりで、ただ闇夜にとけあいゆらめく影だけがあった。

……③から⑧まで省略……

⑨ 長い間ずっと悪夢となって纏わりついていた父の逮捕や、あの記憶に現れる心を打ち砕かれた父のきまってひどく暗い不安な表情、そしてそれに続く父に二度と会えなくなるという恐怖、もしそれら全てが一つの真実ではない記憶によって引き起こされていたのだとしたら、こんなにも長い間感じていた、父を引き止めておくことなど無理で、ただ目の前から消えてゆくに任せるしかないのだという喪失感、こんなにも長い間つきまとっていた傷の痛みは、何もかもが実のないあがきだったというの。

⑩ 朱影紅はふっとため息をついた。……（中略）……まず感じたのは、ついに重荷から解放されたという

安堵感であったが、その後でたちまち別の恐怖にとらわれてしまった。

⑪　林西庚はもう行ってしまったのか、まだ塀の中にいるのか。（傍線筆者）

引用した箇所①～⑪の時間軸と人称を整理すると、①（一人称：七十年代）、②（三人称：五十年代）、③（三人称：五十～七十年代）、④（三人称：七十年代）、⑤（一人称、五十年代）、⑥（三人称：七十年代）、⑦（一人称：七十年代）、⑧（三人称：七十年代）、⑨（一人称：七十年代）、⑩（三人称：七十年代）、⑪（一人称：七十年代）となる。小説の大半は三人称だが、引用箇所では、一人称と三人称とが交錯しているというよりも、七十年代の一人称描写の中に、五十年代三人称描写が組み込まれていることに気付く。

恋人を見送り一人家に残った主人公は、恋人を一目みるため、二階の窓から眺めたとき、二十年前二二八事件で父親が逮捕されたときの記憶が突然到来し、彼女に「もう二度と彼に会えないのだろうか」と恐怖を感じさせた。(7)

恋人との別れには寂しさや切なさを感じるものだが、主人公は恐怖を感じている。この恐怖を感じさせる媒介となったのが「二階の窓から外を眺めていた」身体的記憶である。しかし本書にはこの恐怖を呼び起こさせる二二八事件という語が使われてはいない。李昂がこの固有名詞を使わなかったのは、二二八事件ではなく、その後の白色テロを書いたからなのかもしれないが、二二八事件という歴史的な記号をなぜ使わなかったのだろうか。もちろん、政治的要因で書けなかったのかもしれない、しかし、九十年代には、政府は民衆の要求に応じて、すでに二二八事件の調査を始めていたはずであり、(8)二二八事件は禁忌の語ではなかった。だとすれば、李昂は意識的にこの固有名詞を使わなかったと考えられる。

更にこの別れの場面を整理する。別れに恐怖を感じているのは、三人称で書かれた父親が逮捕された二十年前

ではなく、一人称で書かれた現在である。二二八事件そのものではなく、二十年の歳月を経ても到来する恐怖を書くことを通して、二二八の暴力性を書いている。意識的に固有名詞を書かず、一人称を採用し、個人の記憶として記憶を書いたのだ。そして現在も二二八の恐怖の記憶を感じるものこそ私たちであるという私たちの集団的記憶を書いた。

このように、小説というフィクションの中で、主人公の個人の記憶を遡及し、集団的記憶を書いたのは、「迷園」の主人公が、既存の言語化された記録の中に自分の記憶がない社会的「他者」であることを自明としていたからである。「迷園」は、日本や国民党に支配され、日本や中華民国の歴史しか知らず、自己に基づいた記憶を公に語ることのできなかった一九八〇年代の台湾人という「他者」が自己のアイデンティティを追求した物語なのだ。

三　「他者」の喪失―「迷園」2

㈠「迷園」における「他者」の喪失

「迷園」は新聞連載後、九一年に単行本として出版された。単行本の序文に李昂は次のように書いている。「「迷園」は中國時報連載では、数箇所削除されています。出版された単行本こそが、全文です」（六頁）。

この序文を読み、筆者は、李昂あるいは編集者が新聞社の立場を考慮して、新聞連載における政治批判や性描写の部分を削除したと予想した。そこで、単行本と新聞連載を対照した結果、異なる箇所が七百以上あった。

次の引用文は、本書の最後の場面で、主人公が自分の家の庭園を基金会に寄付した場面である。恋人の「「菡園」を政府に寄付すれば」（二七五頁）との発言に主人公が答えている。

「父の花園を、父を迫害した政権に寄付しろっていうの？」

ことばを切り、それからきっぱりと言った。

「できないわ」

「みんな過ぎた昔のことだよ。今さらつべこべ言ったってしょうがないじゃないか」林西庚の口調は珍しくひどくやさしかった。

「そう、その通り！みんな過ぎたことね。だからこそわたしはこの園林を、台湾のものにしたいの、二千万人の台湾人のものにね。人民を迫害するよういかなる政府のものでもなくて」（傍線筆者）

引用文の傍線部分は政治批判の記述だと判断できるが、削除されていない。こうした明らかな政治批判部分が削除されておらず、性描写も一箇所を除いて削除されていなかった。新聞連載の削除箇所は、政治批判や性描写によるものではないと判断できる。更には単行本部分に削除部分があることもわかった。従って単行本は、単純に新聞連載時の削除部分を補った完全版ではなく、作家が意識的に訂正を加えた改訂版であると解釈できる。

そこで新聞連載分と改訂された単行本とを比較対照した結果、大半が次の三つに関する改訂であった。第一に、日本文を中文に改訂、例えば「お父様」を「父親」など。第二に、英文の増加、例えば「Magic Mountain」（二一八頁）、「Beaujolais 紅酒」（二二五頁）、「Limousine」（二二七頁）など。第三に、台湾についての記述の変化が挙げられる。台湾の記述の変化について具体的に例を挙げてみていきたい。まず、次に引用する二つの文は、新聞連載、単行本共に見られた台湾の記述である。

母親は翌年の秋、父親の死から一年経たない内に亡くなった、台湾に残っていた朱影紅だけが臨終のとき傍にいた。（傍線筆者）（二三九頁）

常緑の台湾中部は、一年中草木が勢いよく生長している。（傍線筆者）（二四〇頁）

「台湾に残っていた」と「常緑の台湾」の「台湾」は、いずれも地名の台湾である。こうした地名としての台湾と比較すると、先に引用した「台湾のものにしたいの、二千万人の台湾人のものにね。人民を迫害するよういかなる政府のものでもなくて」の「台湾」は、当時の政府に対する「他者」としての政治的台湾であるといえる。「迷園」にはこうした「他者」なる政治イデオロギー的「台湾」が多く現れる。例えば、次の「台湾」が該当する。

それから、あの鼻をつく花の香の中、父親はこれ以上ないくらい慎重に厳粛に朱影紅をじっと見つめながら、一字一句言った……

「綾子、覚えておきなさい、台湾はいかなる場所のコピーでも、いかなる場所のミニチュアでもない、台湾は台湾だ、美しい島だ。」（傍線筆者）（一一四頁）

次に引用する文章は、新聞にはないが、単行本のみに加筆あるいは訂正された箇所である。

新聞）なし

単行本）政府の抑制措置で、不動産の価格があからさまに下がり始めると、この牽引車にはもう新たな景気を作り出し推し進める力はなく、経済全体を衰退に導くだけではないかという懸念がさっそく生まれた。しかし、あの島が過去にもしばしば突然襲いかかる台風や地震に持ちこたえたように、あの島の経済もかなり柔軟性に富み、狂乱的上昇、坂を転げ落ちるような下落にも、同じように対応する能力があるようだった。専門家たちは、もし他の地域であれば、不動産の高騰暴落というこれほど急激な変化には耐えられず、経済全体が大きな打撃を受けずにはいられなかっただろうと信じ騒ぎ立て始めていた。こうして、貿易によって急成長を遂げたこの島の経済は、経済成長を作り出す上で奇跡を創り出しただけではなく、急激な景気後退にも耐えうるところまでその奇跡を延長させていた。（二五二―二五三頁）（傍線筆者）

ここでは、「台湾」とは直接記述していないが、「他の地域」と対比し、「あの島」というように実体のある場所としての台湾を相対的にとらえ、その島国台湾のあり方を肯定的な視点で書いている。更に、その台湾の経済的成功を肯定的に書くことで、主人公を、自立した存在として肯定的に暗示しているのみならず、地域としての台湾を、自立した存在として、展望を含め、肯定的に物語化し描写している。

続いて、二つの衣服の描写を見ていこう。

新聞）彼は中国服（原文：唐装）を着用し、白い袖を折り返して遊び人風に着こなしており　（『中国時報』一九九〇年十月一四日掲載）（傍線筆者）

単行本）彼は台湾式シャツ（原文：本島衫）を着用し、白い袖を折り返して遊び人風に着こなしており（一二五頁）（傍線筆者）

新聞）なし

単行本）母親の全身黒の洋装は、立ち襟のジャケットに膝丈のスカートという昔風のデザインだった。今まで母親がチャイナドレスを着ているのを見たことがなく、台湾式の服を着たのもほとんど見たことがなかった朱影紅は、この服にはおそろいの帽子が付いていたのを憶えていた。（一三五頁）（傍線筆者）

まず、主人公の恋人の衣服について書かれた部分は、新聞では、「中国服」だが、単行本では「台湾シャツ」に書き換えられている。続く引用文は、主人公の子どものころの記憶をもとに書かれた母親の衣服についてであり、新聞ではなかったが、単行本で増補された部分である。注目したいのは、朱影紅の母親が、チャイナドレスは全く着なかったが台湾式の服は少しは着たという仔細な事実を提示することで、台湾のエスニシティを強調していることではない。李昂が、台湾のエスニシティを中国のものと意識的に書き分けていることである。だとすれば、

主人公の恋人の衣服の描写の書き換えも、単に台湾のエスニシティを表現するための書き換えと解読するよりも、衣服が文化的エスニシティを表す記号であることが、台湾本土化が進む中、改訂という再認識作業において、意識化され、言語化されたと読み取れるのではないだろうか。

もう一度整理すると、改訂前、新聞連載上の「迷園」の「台湾」は単なる地名あるいは政治的イデオロギーとしての「他者」の記号でしかなかった。だが改訂後の単行本における「台湾」は、客観的地域として、或いは文化やエスニシティの記号として内部矛盾を含んだものとして捉えられていると看取できる。このような変化がもたらされた要因は、「台湾」が政治的文化的「他者」ゆえに持っていた、テクストに「台湾」と書くことの政治的な批判性が、現実の台湾において民主化が進む中で急激に高まり、その後急激に失われたことによると考えられる。こうした九〇年から九一年にかけて行なわれたと考えられる改訂作業、記憶の書き換え作業に、当時の台湾の激動、そして「台湾」という言葉の意味価値の目まぐるしい変容を感じると共に、作家の対応の機敏さと、台湾に生きるものの、記憶として記載すべきものへの意識の変化の軌跡とを見て取ることができるのではないだろうか。「迷園」の主人公の「他者」性が、実社会の変化により消失していく中で行われた改定作業から、実社会とテクストとの距離が非常に緊密である台湾の文学のあり方の一端が看取できる。

(二) 李昂における台湾の民主化と文学

今度は李昂の小説以外の言葉である「迷園」序文（九一年）と、翌年になされたインタビューをみてみよう。

「迷園」序文（九一年二月）

わたし個人について言えば、何よりも大切なのが、自分たち人民のために書くということ。もし、まずこの二千万人の台湾人のために書くのではなく、空しく自我を膨張させて、人類全体のための創作などと考え

ているならば、それはやはり、地に足をつけていないのです。（六頁）

インタビュー（一九九二年四月二日　聞き手＝藤井省三）[9]

明らかな影響が出てくるのは、もう少し時間が経ってからのことだと思います。小説というのは書くことそのものに時間を必要とするからです。ただし、政治的な題材の処理については、面倒がだいぶ減ったのは事実でしょう。わたしが『迷いの園』を書き始めた時はまだ戒厳令の時代でした。これはこう書いてはいけない、あれはああ書かなくてはいけないと、いろいろ神経を使ったものです。

戒厳令解除後、文学に問題が生じてきたこともお話しておきましょう。作家が作品を書こうが書くまいが社会的にたいして意味を持たなくなってきたということです。ある社会問題をテーマに小説を書いたとしても、一、二年かけて書いている内にその問題自体が問題でなくなってしまう、という状況になってきたのです。小説家などよりコラムニストがより迅速に社会の動きに対応できる時代になったのです。[10]

李昂は、「迷園」執筆以前から呂秀蓮や施明徳などと交流があり、政治に全く興味がなかったわけではないと思われるが、李昂が小説に政治的なテーマを扱ったのは、邱貴芬との対談で「政治があなたの小説に正式に現れたのは、「迷園」でしょう」という邱の問いに対して、「そうです。それまでは全く書こうとは思わなかった」[11]と応えているように、九〇年発表の「迷園」からである。作家は「迷園」序文に「自分たち人民のために書く」、「台湾人のために書く」と、作家としての使命を明言している。しかしそのわずか一年後「作家が作品を書こうが書くまいが社会に対して意味をもたなくなってきた」ということを、「戒厳令解除後」に生じた文学の問題として語っている。

政治を小説に書いた「迷園」以降、李昂は、作家としても現実社会と無関係ではいられなくなり、急激な民主化の進行は、李昂の作家としてのあり方を複雑にしたと思われる。だが李昂は小説を書き続ける。以上のことを踏まえ、次節では『自傳の小説』について分析していきたい。

四　「他者」なる主人公の創造――『自傳の小説』

『自傳の小説』は、皇冠叢書より九九年に旅行随筆である『漂流之旅』と同時出版された。台湾女性革命家謝雪紅（一九〇一―七〇）の伝記をもとに、謝雪紅の生涯を編年体で綴った陳芳明『謝雪紅評伝』を意識し書かれた小説である。「自伝」と「小説」という矛盾する二つを「の」という日本語で繋いだタイトルのこの小説は、謝雪紅という実在の台湾の革命家の伝記と、その物語を伯父から伝え聞く「わたし」という語り手の物語であるが、語り手は、時に、謝雪紅に重なり合うなど、その語りは重層的である。

邱彦彬は「日據時代の左翼の伝統がほぼ完全に断絶してしまった現在、謝雪紅を主体とした『自傳の小説』は、台湾のここ十数年の左翼史を洗い出す成果の一つであると見なすことができる」[12]と指摘、左翼史研究として評価し、藤井省三は「連綿と続く家父長制の中にあって格闘する女たちの集団的記憶」[13]というようにフェミニズムの視点から評価している。

この小説の主人公である謝雪紅は実在の人物であり、一九〇一年生まれ、台湾共産党創立者の一人。邱彦彬が彼女の社会的評価について「当時日本植民政府と後の国民党政権など右翼勢力による圧制の下、台湾共産党は次第に忘れられた存在となり、歴史の瓦礫の下に埋没し、歴史家の救援をじっと待つことになった」と述べているように、謝雪紅は、台湾において長い間タブーであり、社会的に「他者」であった。しかし戒厳令後の民主化に

伴い、九〇年に古瑞雲が『台中的風雷』を発表、九一年に陳芳明が『謝雪紅評伝』を出版するなど、謝雪紅に関する書籍も次第に出版され、謝雪紅はもはやタブーではなくなっていく。それどころか台湾史における重要人物となっていった。少なくとも『自傳の小説』が出版された九九年の台湾では、謝雪紅はもはや「他者」ではない。

では、小説『自傳の小説』では、謝雪紅は誰にどのような存在として語られているのだろうか。

『自傳の小説』は三人称と一人称との二つの人称が使われており、一人称の語り主は、語り手、謝雪紅、両者が重なり合っている部分、また特定が困難な箇所もある。更には、語り手の三伯父の言葉や、謝雪紅についての伝記の一部が引用されるなど、『自傳の小説』の語りは多声的であり、謝雪紅は重層的に語られる。[14]

その中で、最も語り手に影響を与えるのは、三伯父による語りである。三伯父の語りによって、語り手にとって「謝雪紅」の三文字は三伯父が幼いときからわたしに脅し文句として使っていた切り札のような名前」（一八頁）となる。この三伯父について、藤井省三は「儒教的家父長制に忠実で滑稽なほどに男尊女卑主義を振りかざす伯父」[15]と評し、上野千鶴子は「謝雪紅と同時代人として設定され、台湾土着の陋習と保守の心情の代弁者であり、謝雪紅をスキャンダルのうちに葬り去った「多数派」のシンボルとしての「三伯父」は、文中、くりかえし登場して、ギリシャ悲劇のコロスの役割をひとりで果たしている」[16]と分析している。先行研究の指摘通り、三伯父は次のように女性蔑視発言を繰り返し、謝雪紅を批判し、語り手を脅す。

『女にとって生死は小事、大事は貞節。昔から烈婦貞女は、死んでも貞節を守り通し、生きて辱められることを恐れたものだ。女にとって貞節こそが一番大事、戦乱の時こそそれが分かるというものよ』（七二、七三、七六頁）

『謝雪紅のような女は昔の妲己や褒姒とだけ比べられる、まさに「女は禍だ」、間違いない』（二七五、二七八

頁）（下線筆者）

瀬地山角は、台湾の家父長制は厳格なものではなかったと指摘しているが[17]、当時の台湾の家父長制度がどういったものであったかに関わらず、『自傳の小説』では、作家が、三伯父を「儒教的家父長制に忠実で滑稽なほどに男尊女卑主義を振りかざす」人物として設定している。語り手は、この三伯父の「女は禍だ」という女性蔑視の思想と共に、三伯父の語りによって「妲己や褒姒」と同じ悪女たる「他者」なる謝雪紅に出会う。

作家は、現実社会においてすでに「他者」ではない謝雪紅を、三伯父の言葉を以て、儒教的家父長制社会における「他者」として書き換えた。つまり、『自傳の小説』では、三伯父の語りが、謝雪紅を「他者」へと置き換える装置として機能しているのだ。よって、物語の終焉において、三伯父が死去すると（三四二頁）、謝雪紅を「他者」化する装置もなくなり、『自傳の小説』は次のように終わる。

思い通りではないとしても、三伯父は少なくとも故郷の地に埋葬された。しかしあなたは？謝雪紅、あなたの帰郷埋葬の願いは、海峡両岸に隔てられた現実の政治の状況下、こんなにも遥かで届かない、たとえ魂魄が帰るとしても、千山万水深海に隔てられ、どうして海を渡り帰郷することができようか。

日が西に沈む海峡の果てを望みながら、涙がとめどなく流れ落ちた。私はこらえきれず小さな声で叫んだ。

謝雪紅。

私が捜し求めたのは、あなたの一生だけではない。

謝雪紅。

あなたの一生、私の一生……

私たち女の一生を。（三四七頁）（傍線筆者）

三伯父の語りにより「他者」化された謝雪紅は、語り手にとって、「他者」なる第三者の「彼女」に過ぎなかった。しかし、語り手は、小説の中で、謝雪紅の物語を自ら語ることを通して、「他者」なる謝雪紅のアイデンティティを追求し、三伯父の死により「他者」化される装置がなくなった終焉では、語り手にとって、謝雪紅は、「あなた」という二人称で呼びかけられる向き合える存在となり、更には「女」という同じ集団的アイデンティティを持った「私たち」仲間となる。語り手にとって、謝雪紅は「他者」ではなくなるのだ。

そして、三伯父という、謝雪紅を「他者」化する装置がなくなり、語り手にとって、謝雪紅が「他者」でなくなると同時に、この物語は終わる。

五　おわりに

「迷園」の主人公朱影紅は、時に「台湾」と同一視され設定されていた人物であり、「迷園」執筆時は、「台湾人」が、現実社会においても社会的に「他者」であったからこそ、小説というフィクションにおいて、主人公が個人の記憶を遡及し、私たち「台湾人」の集団的記憶を書くことが意味を為した。小説の目的は予定通りに達成し得たかに思われる。しかし小説というフィクションでしか為し得なかったはずの私たち「台湾人」の集団的記憶の創出は、現実社会における台湾本土化を通してノンフィクションとして起こっていく。

一方、『自傳の小説』における主人公謝雪紅は、数十年に渡り、歴史的に抹殺されてきたものの、『自傳の小説』が出版された九九年の台湾では、台湾史における重要人物とされ、すでに社会的に「他者」ではなかった。そこで、小説において、作家は意識的に謝雪紅を「他者」として設定し直す必要があり、語り手の三伯父なるものの男尊女卑的な語りを用いることで、男尊女卑下における「他者」なる謝雪紅を作り上げた。物語の終焉において、

三伯父は死ぬ。三伯父の死は、小説における謝雪紅を「他者」化する装置の瓦解でもある。よって、語り手は、謝雪紅を、「他者」なる「彼女」ではなく、「あなた」或いは、「私たち」仲間として呼びかけることができるようになった。語り手にとって、謝雪紅は「他者」ではなくなったのだ。しかし、三伯父という、謝雪紅を「他者」化する装置がなくなり、語り手にとって、謝雪紅が「他者」でなくなると同時に、物語は終わる。

政治を小説に書いた九〇年代の李昂の小説は、「他者」なる主人公なくして、成り立たない。なぜなら、「迷園」と『自傳の小説』は、「他者」なる主人公のアイデンティティ追求の物語であるからだ。だが幸いにも、その「他者」性は、小説というフィクションでは、創造可能であることを、『自傳の小説』は証明した。

注

（1）本稿では、「迷園」（麥田出版、一九九八年 初版）、『自傳の小説』（皇冠文化出版、二〇〇〇年 初版）を底本とした。また翻訳に際し、藤井省三監修 櫻庭ゆみ子翻訳『迷いの園』（国書刊行会、一九九九年）、藤井省三翻訳『自伝の小説』（国書刊行会、二〇〇四年）を参照した。

（2）王德威「華麗的世紀末—臺灣・女作家・邊緣詩學」『想像中國的方法：歷史・小說・叙事』（三聯書店、一九九八年）二八四—二八五頁。

（3）黃毓秀『《迷園》中的性與政治」『當代臺灣女性文學』（時報、一九九三年）八九頁。

（4）林芳玫「《迷園》解析—性別認同與國族認同的弔詭」『女性主義與中國文學』（里仁、一九九七年）二七八頁。

（5）王德威「華麗的世紀末—臺灣・女作家・邊緣詩學」（前掲）二八五頁。

（6）彭小妍「女作家的情欲書寫與政治論述」『北港香爐人人插』（麥田出版、一九九七年）二八〇頁。

（7）岡真理『記憶／物語』（岩波書店、二〇〇〇年）を参照した。

（8）何義麟『二・二八事件—「台湾人」形成のエスノポリティクス』（東京大学出版会、二〇〇三年）二頁を参照した。

(9) 「台湾のフェミニズム文学（李昂インタビュー　一九九二年四月二日台北市ハワードプラザホテルにて　聞き手＝藤井省三）」『夫殺し』（宝島社、一九九三年）一七一頁。

(10) 「台湾のフェミニズム文学」（前掲）一七一頁。

(11) 邱貴芬『（不）同國女人聒噪―訪問當代台灣女作家』（元尊文化、一九九八年）一〇四頁。

(12) 邱彦彬「記憶失控錯置的擬相：李昂《自傳の小説》中的記憶與救贖」（『中外文學』、二〇〇二年一月）一八四頁。

(13) 藤井省三『世界の文学　一〇九』（朝日新聞社、二〇〇一年）十一―二八二頁。

(14) 李昂『自傳の小説』の語りについては、拙論「李昂『自傳の小説』における語り」（『お茶の水女子大学中国文学会報』（二三）、二〇〇四年）に詳しい。

(15) 藤井省三『世界の文学　一〇九』（前掲書）十一―二八二頁。

(16) 上野千鶴子「Book Review 李昂の新しい冒険――〈女（わたし）〉と〈女（わたし）たち〉をめぐる物語――李昂著藤井省三訳『自伝の小説』」（『東方』（二九三）、東方書店、二〇〇五年七月）三〇頁。

(17) 瀬地山氏は台湾の家父長制について「権力の配分においても比較的平等で、役割の配分においても女性が家庭内に束縛されるということはどちらかといえば少ない」と述べている（瀬地山角『東アジアの家父長制』勁草書房、一九九六年）二五四―五五頁。）。

付記　本稿は、台日研究生台湾文学学術研討会での報告論文「李昂《迷園》、《自傳の小説》中的「記憶」描寫與「他者性」」（『台日研究生台湾文学学術研討会論文集』二〇〇三年）を大幅加筆修正したものである。